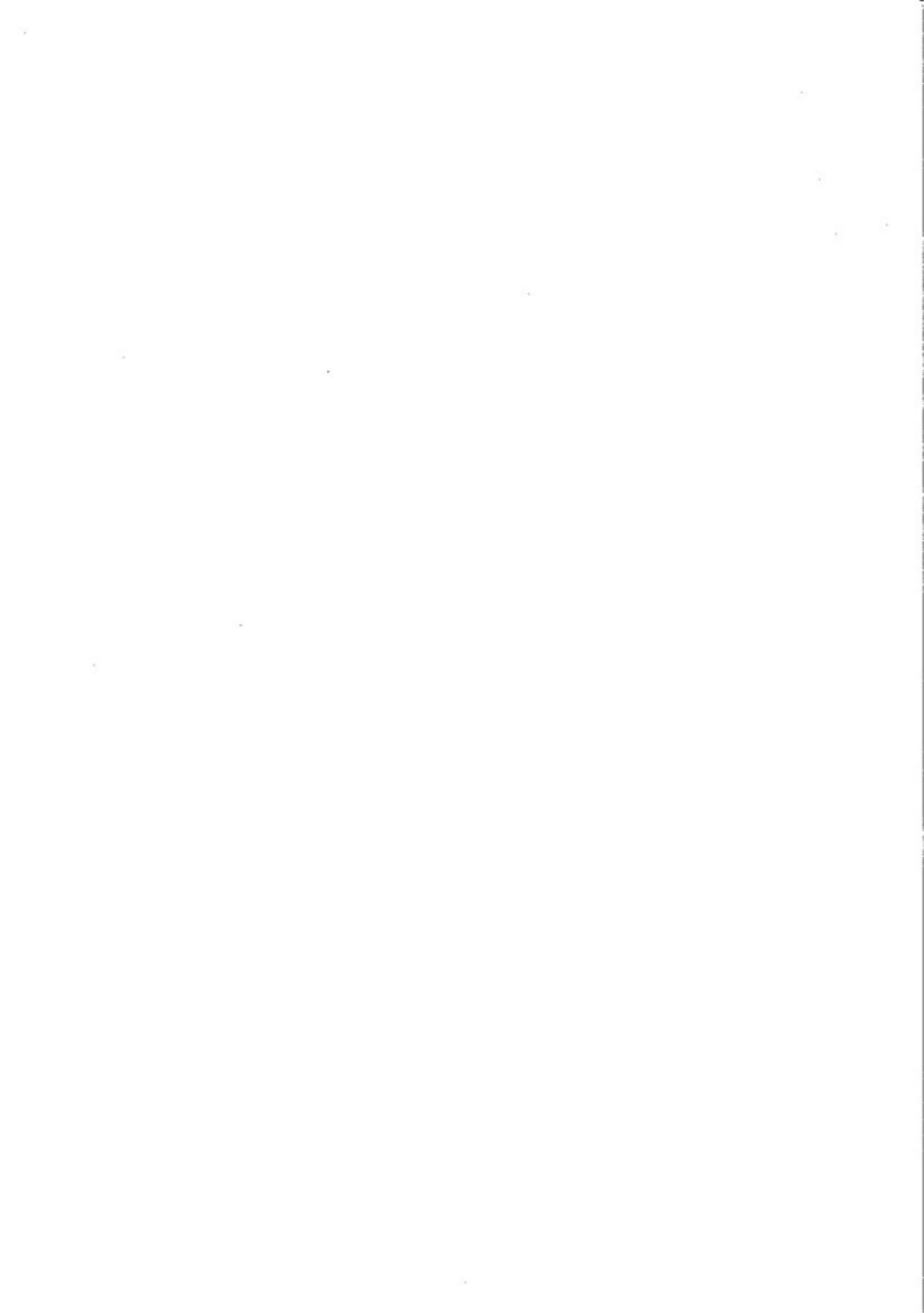


八尾市文化財紀要8

史跡 心合寺山古墳第5次発掘調査概報

1998. 3

八尾市教育委員会



はじめに

心合寺山古墳は、八尾市の東につらなる生駒山系の麓に築かれた、北・中河内最大の前方後円墳であります。昭和41年に国の史跡に指定されました。

八尾市教育委員会では、この心合寺山古墳を市民の方々をはじめ、多くの人々に親しまれる場として保存整備を計るため、平成3年度から継続して基礎発掘調査を行い、史跡整備の基本構想の策定を行うなどの準備作業を行ってまいりました。

そして本年度からは、いよいよ本体整備のための発掘調査を、文化庁の国庫補助事業として開始いたしました。その結果、心合寺山古墳の墳丘の少なくとも西側については、3段で築造されていること、墳丘の全長が160m以上になることが判明するなど、大きな成果を収めることができました。発掘調査の成果は、今後継続して資料の整理を行い、報告書としてまとめることと予定です。が、貴重な成果をできるだけ早い段階で公表する必要性を考え、今回略式の報告というかたちで、本書をとりまとめました。本書が心合寺山古墳の貴重な学術的価値を多くの方々に知っていただく一助となれば幸いに存じます。

末筆となりましたが、発掘調査を進めるにあたりましては、地元の方々をはじめとする市民の皆様方、史跡整備委員の諸先生をはじめ、関係各位から、多大なご助力、ご指導を賜りました。心より厚く御礼申し上げます。

平成10年3月

八尾市教育委員会

教育長 西谷信次

例　　言

1. 本書は八尾市教育委員会が平成9年度に実施した調査のなかで特に成果のあった国史跡心合寺山古墳の第5次発掘調査の略式報告を八尾市文化財紀要としてとりまとめたものである。
2. 本調査は八尾市教育委員会文化財課が実施し、本課技師吉田野々が担当した。
3. 調査にあたっては心合寺山古墳史跡整備委員の御指導をいただいた。史跡整備委員の名簿は下記のとおりである。

村川行弘　大阪経済法科大学 総合科学研究所所長 教養部教授

堅田 直 帝塚山大学 考古学研究所長 教養学部教授

和田 晴吾 立命館大学 文学部教授

井藤 徹 (財) 大阪府文化財調査研究センター 調査部長

加藤 允彦 奈良国立文化財研究所 墓藏文化財センター 保存工学研究室長

(順不同 敬称略)

4. 本書の編集と執筆は調査担当者が行った。

目　　次

1. 調査の目的と経過.....	1
2. 発掘調査の概略.....	4
3. 小結.....	6
報告書抄録.....	7

写真図版

1. 調査の目的と経過

心合寺山古墳は八尾市大竹4丁目、5丁目に所在する。八尾市の北東部、生駒西麓の扇状地先端部に立地する。墳丘の規模は全長160m以上、周濠部を含めた全長は250m以上を測る、北・中河内最大の前方後円墳である。当墳は標高35~26mの西下がりの傾斜地に立地し、前方部を真南に向け、主軸をぴつたりと南北方位に揃えている。

心合寺山古墳は、出土円筒埴輪等から古墳時代中期の第2四半期頃に築造されたものと考えられ、この時代に中河内一帯を治めた地域首長墓とみられる。

現在、心合寺山古墳の周辺では、同時期の古墳は確認されていないが、前期の古墳では、北東方向の山麓に、向山古墳、西ノ山古墳、花岡山古墳といった前方後円墳が築かれている。これらは心合寺山古墳の前代の首長墓と考えられる。

心合寺山古墳の西側、眼下に望む平野部には大竹西遺跡、池島・福万寺遺跡をはじめとした古墳時代の集落の確認された遺跡が拡がっている。これらの集落は、心合寺山古墳の造墓主体を輩出した集団の母体とみられる。

心合寺山古墳は昭和41年2月25日に国の史跡に指定された。現在、墳丘は樹木や草で覆われており、八尾市では年に数回の草刈り等を行っている。これまで小学生の歴史学習の場をはじめとして、市民に利用されてきた。が、墳丘の損壊の危険性があるため、部分的な利用に供することしか行い得ない状況であった。このため心合寺山古墳の保存整備を行い、広く市民をはじめとして人々に利用される場としていくことが、重要な課題であった。さらに昭和63年には前方部前面の埴輪列が長年の侵食により露出し、緊急発掘調査を行い保護処理を行うという事態が生じ、早急に保存整備を行う必要性が認識された。

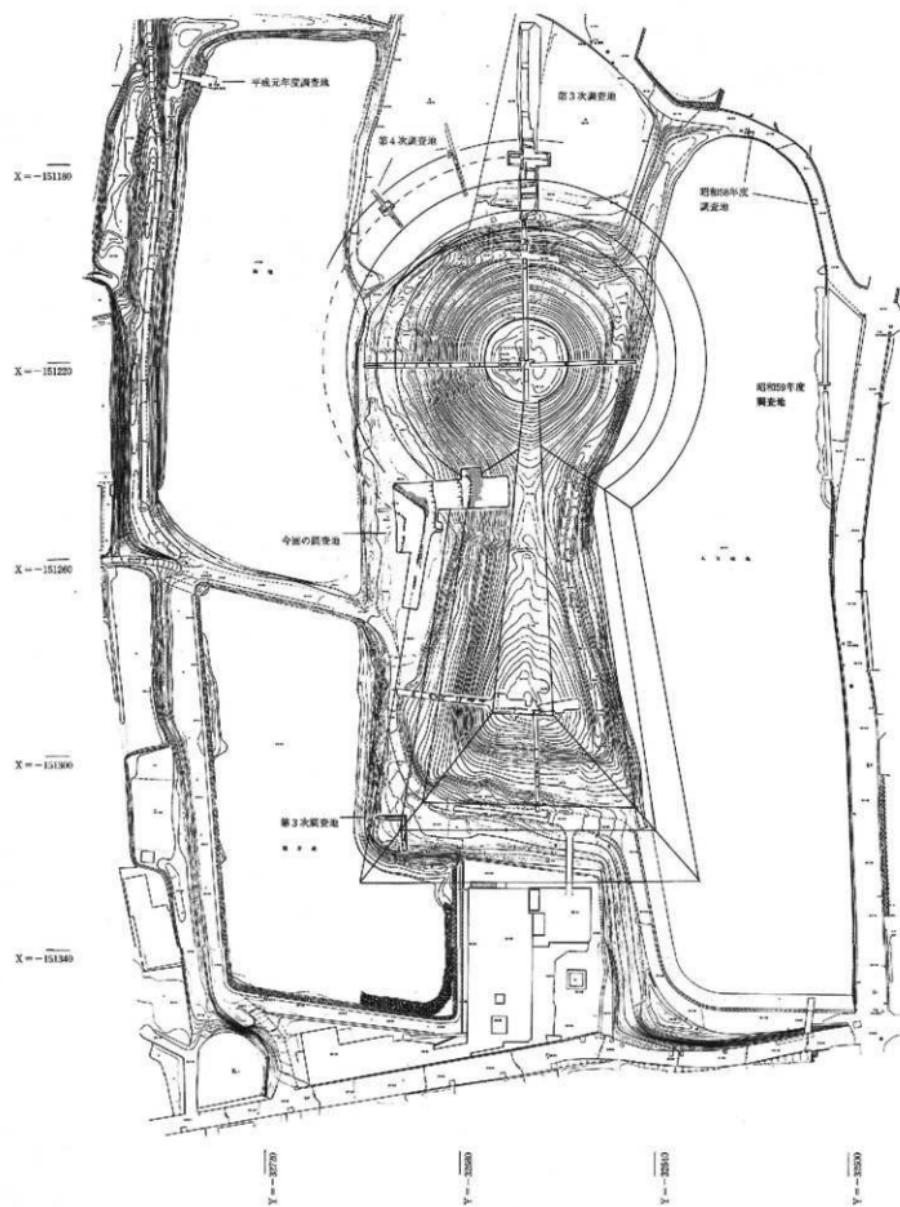


第1図 心合寺山古墳周辺図 (1/10,000)

これを受け、八尾市教育委員会では、平成3年度に航空写真測量を行い、平成4年度からは史跡整備委員を委嘱し、その指導のもとに基礎発掘調査を開始した。基礎発掘調査は平成4年度から平成6年度まで3次にわたって行い、この成果をもとに平成6年度の3月には『史跡心合寺山古墳整備基本構想報告書』を刊行した。平成7年度は基礎発掘調査の報告書作成作業を行い、平成8年度は、今後の本発掘調査のための予備発掘調査を行った。これまでの調査の概要は表1のとおりである。平成9年度からは、本体整備に向けての本格的な発掘調査を、文化庁の国庫補助事業として3ヵ年計画で開始した。初年度である本年度は、平成5年度にくびれ部の結節点を確認した、西側くびれ部から前方部にかけての発掘調査を行った。

調査年	調査事項	文献番号
1983（昭和58）	大竹総池北東部推定外堤部分にて、護岸工事にさきだつ試掘調査。古墳の外堤にあたる遺構は確認できず。	八尾市教育委員会「八尾市内遺跡昭和58年度発掘調査報告書」1984年
1984（昭和59）	大竹総池北東部推定外堤部分にて、護岸工事にさきだつ発掘調査。築造当時の外堤に使用された葺石と思われる石材を確認。さらに一部で外堤の可能性のある石材の並ぶ部分を確認。また上層で中世の堤確認。中世堤の盛土から埴輪片が出土することから、外堤上に埴輪列の存在する可能性が考えられた。	八尾市教育委員会「八尾市文化財紀要Ⅰ」1985年
1988（昭和63）	前方部前面の墨道部分に埴輪片の散乱がみられたため、墨道の整備にさきだつ発掘調査。段築平坦面に樹立された東西方向の埴輪列を長さ14m、14個体検出。	八尾市教育委員会「八尾市文化財紀要6」1992年
1989（平成元）	池の北西隅堤部分の橋替付け替え工事に伴う発掘調査。この部分は外堤は後世のものであることが判明。さらに正徳6年（1716年）の振替の紀年銘をもつ橋替の櫛板を確認。	（財）八尾市文化財調査研究会 『八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度』1992年
1993（平成4） (第1次)	史跡整備のための基礎発掘調査。墳丘部に8ヵ所のトレンチを設定。調査面積は215m ² 。前方部墳頂部を画する埴輪列や、西側段築平坦面痕跡と葺石の残る上段斜面の確認をはじめとして、墳丘全体の遺存状況に関する知見を得る。	八尾市教育委員会「史跡 心合寺山古墳基礎発掘調査報告書」1996年
1993（平成5） (第2次)	史跡整備のための基礎発掘調査。前年度の調査で遺存状況の良好であった、西側くびれ部裾に約55m ² のトレンチを設定。後円部と前方部の結節点付近の葺石基底石を確認する。	
1994（平成6） (第3次)	史跡整備のための基礎発掘調査。後円部の北側の推定周濠部分に南北方向のトレンチを前方部南西側にし字型のトレンチを設定。調査面積は約186m ² 。周濠の痕跡及び周濠側と墳丘側との間を埴輪列を樹立した平坦面を検出。	
1996（平成8） (第4次)	史跡整備のための予備発掘調査。第3次調査で確認した後円部北側の周濠状痕跡と、埴輪列の延長を確認するため、この西側に南北方向のトレンチを2ヵ所設定。調査面積は39m ² 。東側調査区では周濠状痕跡を、西側の調査区では埴輪列を検出。	未報告

表1 心合寺山古墳におけるこれまでの主な発掘調査



第2図 調査区設定図 (1/1,000)

赤堀丘部の7ヶ所のトレンチ 第1次調査地
前方部裏追部のトレンチ 昭和63年度調査地

2. 発掘調査の概略

今回の発掘調査は、基礎調査から数えて第5次目の調査となる。調査面積は約270m²であり、下方調査区の約160m²を調査したのち、上方調査区約110m²を調査した。調査期間は平成9年7月1日から9月29日までである。下方調査区は、基礎調査において流入土が約1.8m近くまで及び、そのうち地表下約1.0m前後までが、現代の流入土であることを確認していたため、この土層および基礎調査時の埋め戻し土については、小型の重機を利用して掘削を行ったのち、人力にて掘削した。

(1) 下方調査区の調査

墳丘西側くびれ部の下段斜面裾の葺石と、これに西側で並行する埴輪列を確認した。基礎調査時にはこの葺石を墳丘裾と想定し、心合寺山古墳の墳丘は2段築成で、基壇状の施設を最下段にもつ可能性を考えてきた。しかし、今回の調査でこの葺石の西側に埴輪列を樹立する平坦面が存在することが明らかになり、この平坦面が3段築成の最下段上面である可能性も生じてきた。仮に3段築成であれば、この葺石は中段裾と称するべきであるが、現段階では最下段部分が墳丘全体に存在するのか、また葺石を斜面に有するのかも判然とせず、未だ性格が不明である。このため現段階では、この部分については下段斜面裾、この西側の平坦面を構成する部分を最下段と仮称することにする(第3図)。

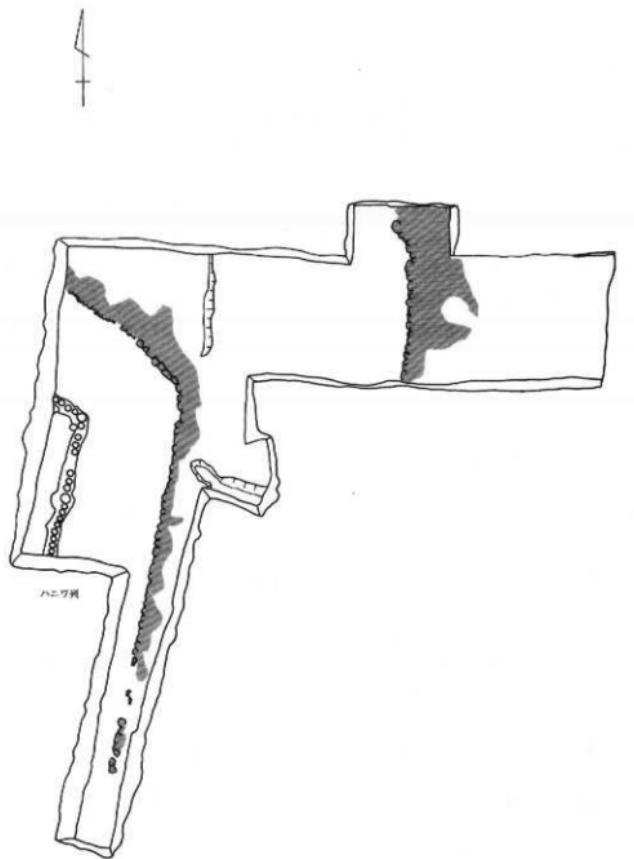
[層序] 最下段上面を覆う土層の状況を、トレンチ西端近くの南壁を例にして記す。地表下0.9~1.0mまでは、墳丘を削平した土などを含む現代の土層である。この下は地表下1.3~1.4mまで、瓦器小片などを含む黄灰色~灰茶色の粘性砂質土層である。さらにこの下は地表下1.5~1.6m付近まで、埴輪片、瓦片を多量に含む暗黄灰色小砾混砂質土層である。これは心合寺関係の遺物を含む土層である。埴輪列内の埴輪の上部は、この土層により削平を受けたとみられる状態であった。この下は地表下1.7~1.8mまで、埴輪片のみを含む淡灰茶色小砾混砂質土が堆積する。この層は墳丘構成層に類似する。これを除去すると墳丘構成層である茶灰褐色粘質土となる。

[下段斜面裾の葺石の状況] 基底石を後円部と前方部の結節点から後円部側へ約3m分、前方部側へ約17m分検出した。結節点の基底石ラインの角度は約140度を測る。基底石下端の高さは、標高28.9m前後である。葺石の葺き方は、前方部側に数ヶ所、基底石ラインに対し直交する区画石がみられる。後円部の葺石のありかたは特徴的である。結節点から北西方向に直線的に基底石が延びるが、結節点から2mの地点で約0.5m程内側へ入り、さらに直線的に延びる。そしてこの外側の本来基底石ラインが通る部分には、長軸長15cm前後の小振りの石を敷き並べている。全体的な葺石の遺存状況は下段裾の基底石付近で僅かに残存している状況であり、特に南側では遺存状況が悪く基底石が数ヶ所失われている。

[最下段上面平坦面および埴輪列] 下段斜面裾の西側には、平坦面が幅5m以上西側へ拡がることを確認した。平坦面の標高は、28.55~28.9mの南西下がりの緩傾斜面である。上面に一部葺石が載るが、並び方に規則性はみられず、転落石の可能性が高い。この平坦面上では、基底石ラインと約4m前後の間隔で並行する埴輪列を、23個体確認した。埴輪列は後円部前方部間の結節点にあたる部分に大型品を配し、前方部側へ10本分の小型品をはさんで、大型品を配する。大型品の径は35cm前後、小型品の径は20~25cm前後である。埴輪列の掘り方は溝状の布掘りで、幅は円筒埴輪の大小に合わせて設定されており



第3図 調査各部位の名称 (1/1,250)



■ 石核部分

0 10m

第4図 掘出遺構概略図 (1/200)

	後円部	前方部	くびれ部		後円部	前方部	くびれ部
径・長 径 下段 下段	(90m前後) 8m前後 T段	幅 基下段 T段	幅 基下段 下段 (1.2m前後)	高 頂部 下段基部	30.9m以上 28.9m	頂部 下段基部	30.2m以上 28.9m 下段基部 下段上段平坦面(31.4m)
傾斜角度 (28°前後)	(28°前後)	(28°前後)	(30°前後)	下段基部から の北高	11m以上	基部 11m以上	西端 下段上段平坦面 3.0m
							() 内は推定。

表2 墳丘各部の法量

り、大型品で幅1m前後、小形品で幅0.5m前後である。掘り方の深さは0.15m前後で、大型品の基底高に合わせて設定されるようである

〔心合寺関係の遺物〕地表下1.5m前後の暗茶灰色小礫混砂質土層から、埴輪片とともに、瓦片、須恵器片等が出土した。これらは平安時代を下限とする遺物であるが、このなかに単弁八葉蓮華文軒丸瓦が1点含まれていた。これは7世紀後半に位置付けられ、心合寺創建時の軒丸瓦となる可能性がある。心合寺山古墳の西側一帯は瓦等が多く採集され、秦氏一族の氏寺とも考えられている、心合寺推定地となっている。平安時代に心合寺山古墳の墳丘の西側裾部分が、心合寺に関わる施設として利用されるなどして、削平されたものと考えられる。

(2) 上方調査区の調査

ここでは、上段斜面の葺石と、これにつながる下段上面の平坦面の痕跡を確認した。上段斜面葺石最下段では、基底石の並びを確認した。ここでも後円部・前方部間結節点を確認した。この位置は最下段上面埴輪列と下段基底石ラインのそれぞれの結節点を結んだ延長上になる。

〔上段斜面葺石の状況〕基底石は結節点から後円部側へ約1m分、前方部側へ約5.7m分を検出した。基底石の下端の標高は、31.9m前後を測る。結節点の基底石ラインの角度は、下段据と同様約140度を測る。葺石の遺存状況は上段斜面下方で、平面距離にして最大幅2.5mで遺存するが、トレンチ南側では遺存状態が悪い。基底石は後円部側へは3個しか遺存していない。葺石の葺き方であるが区画石は基底石ラインの結節点では、後円部中心方向に向かって斜め方向に1ヶ所と、前方部方向に対し直交する方向に1ヶ所みられる。さらに前方部側へは基底石ラインに対し直交する区画石が4~5ヶ所みられる。

〔下段上面平坦面〕基底石ラインに西接し最大幅2.3mまで、標高31.4m~31.9mの緩傾斜面であり、そこから西は急傾斜となり下方へ続く。緩傾斜面は段築平坦面の痕跡とみられる。ここでは削平を強く受けおり、埴輪列は掘り方の痕跡すら確認できなかった。

3. 小 結

今回の調査では、主に次のような成果を得た。まず、墳丘西側くびれ部の上段と下段の裾部で、後円部・前方部間結節点とその延長にあたる葺石を検出し、墳丘復元の際の貴重な資料を得た。さらに下段裾西側で、埴輪列を樹立する平坦面を確認した。平成6年度に行った基礎発掘調査では、後円部部側と周濠部側の間に、幅8mの平坦面を確認している。この平坦面は標高28.8m~29.0mを測り、中央付近に埴輪列をめぐらす。埴輪列の並べかたは、今回の調査と同様に小形品を10本はさんで、大型品を配するものである。今回確認した平坦面は、平坦面自体の高さや埴輪列の配し方から、これとつながるものである。このことから、心合寺山古墳の墳丘構造は、少なくとも墳丘の西半分について、3段に築造されていた可能性がある。ただし今回の調査では、最下段裾の確認がでておらず、この部分が3段築成の最下段として、完全な機能構造を有していたのか判然としない。ましてやこの部分が墳丘全体に廻るか否かは、心合寺山古墳が西下がりの傾斜地に築造されているだけに、今後の調査成果を待って、慎重に判断していくことが、肝要であると考える。今後、調査を進め明らかにしていきたい。

報告書抄録

ふりがな	しせき しおんじやまこふん だいごじはくつちょうさがいほう
書名	史跡 心合寺山古墳第5次発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	八尾市文化財紀要
シリーズ番号	8
編集者名	吉田野々
編集機関	八尾市教育委員会
所在地	〒581-0003 八尾市本町1丁目1番1号
発行年月日	西暦 1998年3月31日
直0729-91-3881	

所取遺跡名	所在地	コード	北緯	北緯	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号	...			
しおんじやまこふん 心合寺山古墳	大阪府 八尾市 大竹	27212	34° 38' 10"	135° 38' 40"	19970701 ~19970929	270	史跡整備

ふりがな 所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
しおんじやまこふん 心合寺山古墳	古墳	古墳時代	墳丘西側くびれ部の上段 斜面葺石と下段斜面葺石。 墳丘下段平坦面上の埴輪列。	埴輪、瓦、土師器、須恵器	・西側くびれ部で埴輪列を樹立する最下段平坦面を確認し、この部分が基礎調査時に確認した後円部北側の周濠との間の平坦面とつながることが判明。墳丘構造は、墳丘の少なくとも西半分については、3段になる可能性がでてきた。
しおんじ 心合寺	寺院	白鳳～平安時代	包含層	軒丸瓦、平瓦、丸瓦、土 器、須恵器	・最下段平坦面を覆う平安時代を下限とする遺物包含層から白鳳時代の車介八葉蓮華文軒丸瓦が出土。

図版

図版 1 空撮写真



航空写真（南上空より）



下側調査区（真上より）



下側調査区（真上より）



下側調査区（東より）

図版 3 空撮写真

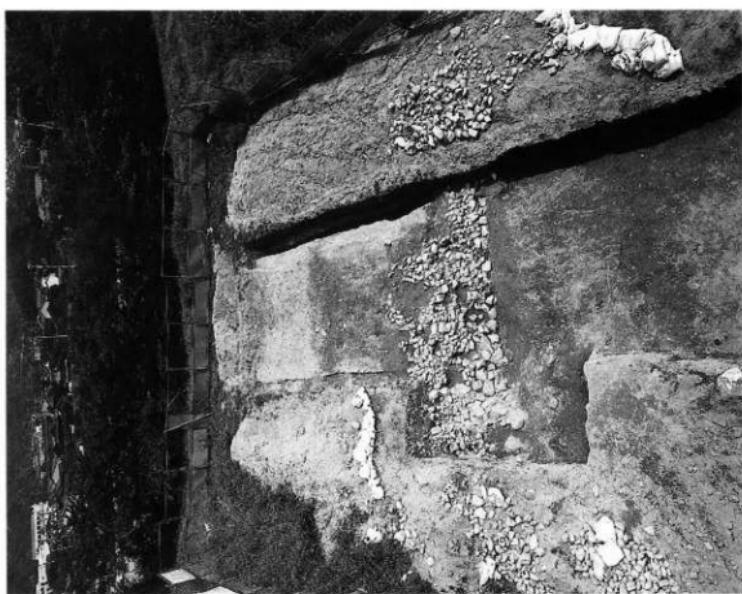


調査区全景（南西より）



調査区くびれ部付近（西より）

図版 4 空撮写真



上方調査区（西より）



上方調査区（東より）

(天)

八尾市文化財紀要8

史跡 心合寺山古墳第5次発掘調査概報

発行年 1998年3月
発行 八尾市教育委員会
編集 八尾市本町1丁目1番1号
印刷 社会教育部 文化財課
近畿印刷センター

(八尾市刊行物番号H9-72)

